長崎大学における教養セミナーの現状と課題

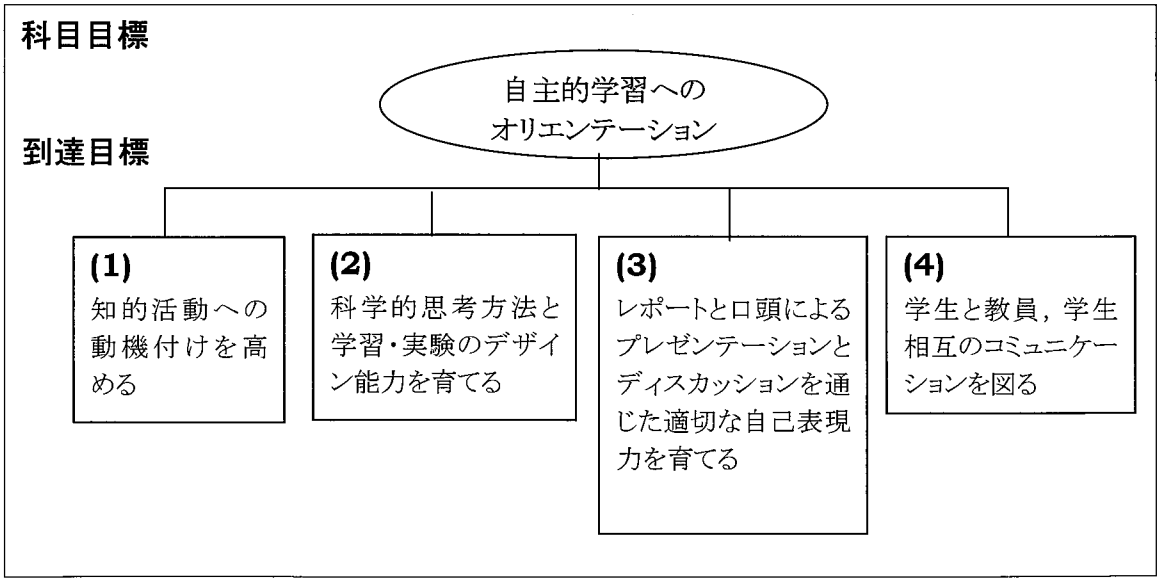
長崎大学大学教育機能開発センター 教授 髙橋 正克

長崎大学では，平成 14 年度より，初年次前期の必修科目として少人数セミナー（教養セミナー）が開講された。1クラス 10 名程度の少人数で，テーマは教官と学部混在型に割り振られた学生との話し合いで決める。

【教育目標】

教養セミナーの教育目標・到達目標は他大学のそれとほぼ同様と思われるが，本学では，大学入試以前の教師主導型を主とする学習からの転換を図り，大学における自主的な学習へのオリエンテーション機能を果たすことを目標とする。そのため，① 知的活動への動機づけを高め，② 科学的な思考方法と学習・実験のデザイン能力，③ レポートと口頭によるプレゼンテーションとディスカッションを通じて適切な自己表現能力を育てることを具体的目標とする。また，大学での学習の入り口として，④ 学生と教員及び学生相互のコミュニケーションを図り，グループ作りに役立てることも狙いとしている。（図 1）。

図 1. 長崎大学教養セミナーの科目目標および到達目標



【特　色】

本学の教養セミナーの主な特色として以下の 3 点が上げられる。

<u>教員・学生ともの学部混在型のクラス編成</u>

様々の学部の学生を対象とした総合大学の長所を活かす。専門の異なる分野の教員

や学生が混じり合いクラスをつくることによって，学生は教員や人によって多様な見方，考え方，発想があることを早い段階で知る。このことは，専門を幅広い角度から認識し，将来，新しい専門分野を展開するのに有効である。(表 1)。

テーマは，教官と学部混在型に割り振られた学生との話し合いで決定

他大学で多くみられる教員別に提示された授業テーマを学生が選択する方式ではなく，教員や学生の異なる価値観・学習観・研究観に多く触れる機会をもつことになるので，多様な考え方を涵養できる。

1 クラス 10 人程度の少人数セミナー

初年次セミナー科目をすでに導入している他大学と比較しても極めて少人数のクラスで開講している。

その他，教養セミナーの円滑な講義を支援するため，附属図書館による資料収集ガイダンスおよびプレゼンテーションなどに必要なコンピューター活用法ガイダンス（後者は平成 15 年度から）を 90 分づつ，希望クラスに提供している。

表 1.　日本の「初年次教育」

		必　　修	必修選択	選　　択
学部混在	完全	北海道・大阪・熊本 （東北・宇都宮）	九州 三重	香川
	グループ別	名古屋　**長崎**		
学部別		*広島・筑波・茨城・信州・岐阜・静岡・滋賀・愛媛・山口・宮崎*		京都

明朝体：学問テーマ選択型／*イタリック体：テーマ決定型*／**ゴチック体：担当教官決定型**

（平成 14 年 12 月調査）

【教養セミナー担当教官に対する FD 活動】

教養セミナーを担当する教官を対象に，教養セミナーに特化した種々の FD 活動を行い，教官の教養セミナー授業に対する支援を行っている。

第 6 回「授業デザインの方法」

「科目目標」「具体的到達目標」「評価基準」を要点としたシラバスの設計による授業づくりの基本的方法を確立する（14年9月17日）

第 7 回「教養セミナーの実践と課題」

事例発表，アンケート調査報告およびグループ別シラバス作成シミュレーションによって次期担当教官の授業取り組みを支援する（14年12月14〜15日）

第１０回「全学教育の具体的課題と改善方法」

教育内容上の課題について担当教官との議論により改善方策を示し，科目開発と授業改善を図る(15年9月16日)

第１１回「『教養セミナー』を創る」

シラバス作成を通して授業設計基本方針の確認と，教養セミナー専門委員会（カリキュラム設計者）と授業担当者間とで授業内容上での改善点を議論して組織的な科目開発及び授業改善に向けた活動を行う（15年12月13-14日）

【教養セミナーに対する学生・教官アンケート結果(平成14・15年度)】

教養セミナーに対するアンケート調査を平成14年および平成15年に学生および教官にそれぞれ行った。評価項目は到達目標に対応しており，また，教官および学生間とも整合性を検討するため，両者間の項目もほぼ対応させた。

表2.　到達目標に対する評価項目　－学生用－

対応到達目標	番号	評価項目
(1)	1.	自ら調べて学ぶ機会があった。
(2)	2.	問題意識または問題点の分類と整理についての方法を学ぶ機会があった。
	3.	学習あるいは実験の方法を学ぶ機会があった。
	4.	学内施設（図書館等）を活用する適切な資料収集方法を学ぶ機会があった。
	5.	収集した資料や情報の組み立て方やまとめ方について学ぶ機会があった。
(3)	6.	プレゼンテーションをする機会があった。
	7.	レポートの作成法について理解できた。
	8.	他の学生とディスカッションをする機会があった。
	9.	私は他の学生とディスカッションを実際に行った。
	10.	教員とディスカッションをする機会があった。
	11.	私は教員とディスカッションを実際に行った。
	12.	授業内で発言する機会があった。
	13.	私は授業内で実際に多く発言した。
	14.	教員からディスカッションが活発になるような働きかけがあった。
(4)	15.	教員と授業内容についての話をする機会があった。
	16.	他の学生と授業内容についての話をする機会があった。
目標以外の基本データ	17.	「教養セミナー」は今後の大学での学習に有益な授業であると思った。
	18.	「教養セミナー」は今後も続けるべきだと思った。

対応到達目標(1)知的活動への動機付けを高める。(2)科学的思考方法と学習・実験のデザイン能力を育てる。(3)レポートと口頭によるプレゼンテーションとディスカッションを通じた適切な自己表現力を育てる。(4)学生と教員、学生相互のコミュニケーションを図る。

表 3.　到達目標に対する評価項目－教師用－

対応到達目標	番号	評価項目
(1)	1.	自ら調べて学ぶ機会を設けた。
(2)	2.	問題意識または問題点の分類と整理についての方法を教える機会を設けた。
	3.	学習あるいは実験の方法を教える機会を設けた。
	4.	学内施設（図書館等）を活用する適切な資料収集方法を教える機会を設けた。
	5.	収集した資料や情報の組み立て方やまとめ方について教える機会をもった。
(3)	6.	プレゼンテーションをする機会を設けた。
	7.	レポートの作成法について学生に分かりやすくアドバイスをした。
	8.	他の学生とディスカッションをする機会を設けた。
	9.	教員とディスカッションをする機会を設けた。
	10.	学生が授業内で発言できる機会を設けた。
	11.	教員からディスカッションが活発になるように働きかけを行った。
(4)	12.	学生と授業内容について話をする機会をもった。
	13.	学生間で授業内容について話をするよう促した。
目標以外の基本データ	14.	「教養セミナー」は学生を専門教育に導くうえで有益であると思った。
	15.	「教養セミナー」は今後も続けるべきだと思った。
	16.	「学部混成型」は今後も続けるべきだと思った。

対応到達目標(1)(2)(3)(4)は学生用と同様。番号 16 は平成 15 年からの追加項目。

表３－１　　平成１４年度教養セミナー（学生用）アンケート結果　　学生数＝1458

	肯定的回答率	度数分布				総数(人)
		A	B	C	D	
[1]　自ら調べて学ぶ機会があった。	96.3	13	41	464	924	1442
[2]　問題意識または問題点の分類と整理についての方法を学ぶ機会があった。	87.7	15	163	877	387	1442
[3]　学習あるいは実験の方法を学ぶ機会があった。	79.4	32	265	820	325	1442
[4]　学内施設(図書館等)を活用する適切な資料収集方法を学ぶ機会があった。	85.5	43	166	646	587	1442
[5]　収集した資料や情報の組み立て方やまとめ方について学ぶ機会があった。	86.8	16	174	749	502	1441
[6]　プレゼンテーションをする機会があった。	89.8	36	111	527	766	1440
[7]　レポートの作成法について理解できた。	79.9	24	266	783	370	1443
[8]　他の学生とディスカッションをする機会があった。	68.0	85	375	658	321	1439
[9]　私は他の学生とディスカッションを実際に行った。	54.4	167	491	540	245	1443
[10]　教員とディスカッションをする機会があった。	70.3	79	350	734	281	1444
[11]　私は教員とディスカッションを実際に行った。	56.6	118	489	589	202	1398
[12]　授業内で発言する機会があった。	85.3	36	170	751	443	1400
[13]　私は授業内で実際に多く発言した。	37.5	178	696	409	115	1398
[14]　教員からディスカッションが活発になるような働きかけがあった。	81.1	31	233	768	362	1394
[15]　教員と授業内容についての話をする機会があった。	74.9	48	304	773	275	1400
[16]　他の学生と授業内容についての話をする機会があった。	74.8	61	292	746	300	1399
[17]　「教養セミナー」は今後の大学での学習に有益な授業であると思った。	74.9	97	254	706	341	1398
[18]　「教養セミナー」は今後も続けるべきだと思った。	69.1	123	303	649	305	1380

肯定的回答率　＝（C＋D）

表３−２　平成１５年度教養セミナー（学生用）授業評価結果　　学生数＝843

	肯定的回答率	度数分布				総数(人)
		A	B	C	D	
[1] 自ら調べて学ぶ機会があった。	98.9	2	7	237	597	843
[2] 問題意識または問題点の分類と整理についての方法を学ぶ機会があった。	90.8	2	75	485	277	839
[3] 学習あるいは実験の方法を学ぶ機会があった。	84.1	11	123	495	213	842
[4] 学内施設(図書館等)を活用する適切な資料収集方法を学ぶ機会があった。	91.9	8	62	389	383	840
[5] 収集した資料や情報の組み立て方やまとめ方について学ぶ機会があった。	92.9	6	54	426	356	842
[6] プレゼンテーションをする機会があった。	93.0	8	51	297	485	841
[7] レポートの作成法について理解できた。	88.1	5	95	464	277	841
[8] 他の学生とディスカッションをする機会があった。	73.8	28	193	382	239	842
[9] 私は他の学生とディスカッションを実際に行った。	65.0	59	236	353	194	842
[10] 教員とディスカッションをする機会があった。	73.9	29	191	476	146	842
[11] 私は教員とディスカッションを実際に行った。	60.6	46	281	402	101	830
[12] 授業内で発言する機会があった。	89.3	10	79	449	293	831
[13] 私は授業内で実際に多く発言した。	44.8	63	396	280	92	831
[14] 教員からディスカッションが活発になるような働きかけがあった。	83.2	13	126	461	229	829
[15] 教員と授業内容についての話をする機会があった。	80.0	18	148	465	198	829
[16] 他の学生と授業内容についての話をする機会があった。	82.5	16	129	454	231	830
[17] 「教養セミナー」は今後の大学での学習に有益な授業であると思った。	85.0	33	92	442	264	831
[18] 「教養セミナー」は今後も続けるべきだと思った。	79.1	50	123	419	236	828

肯定的回答率　＝（C＋D）

度数分布　A: 全くそう思わない　B: そう思わない　C: そう思う　D: 強くそう思う

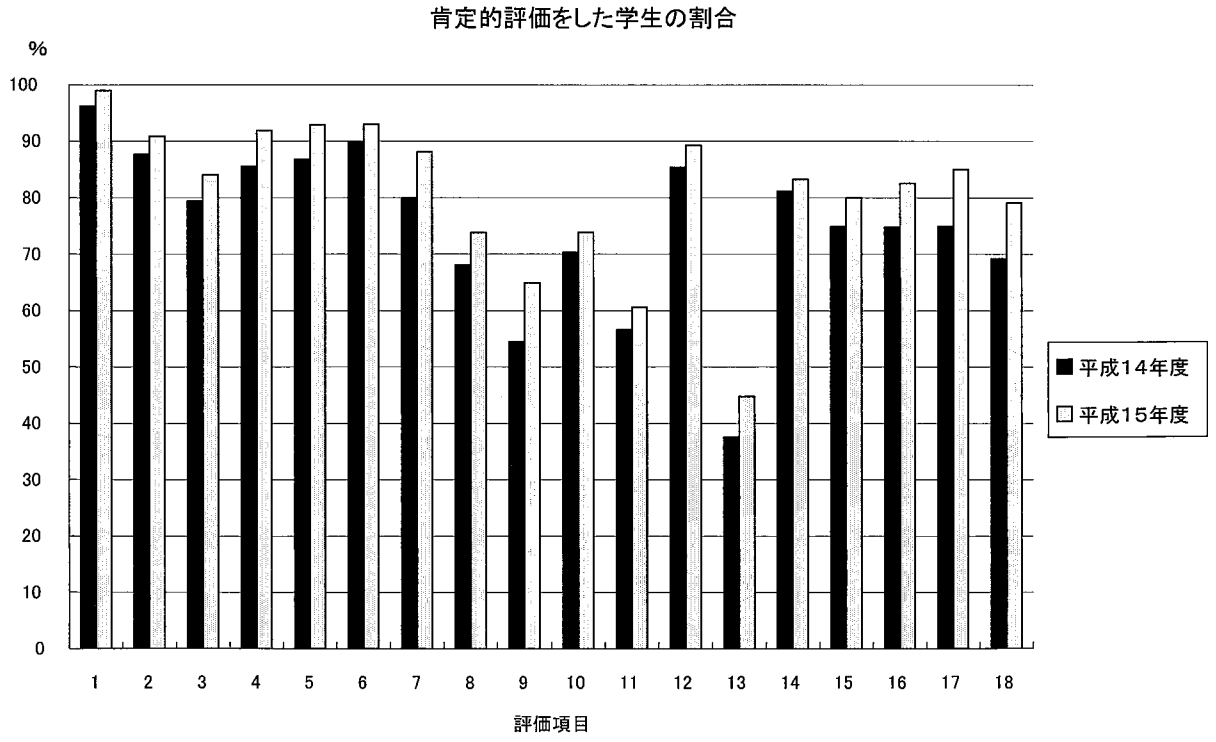


図 2.　学生への教養セミナーアンケート調査結果の経年的変容

肯定的回答率　＝（C＋D）

学生への教養セミナー到達目標別に設計したアンケート調査結果では，評価の高い項目として，「(1) 自ら調べて学ぶ機会があった。」「(6) プレゼンテーションをする機会があった。」の他，「(2) 問題意識または問題点の分類と整理についての方法を学ぶ機会があった。」「(4) 学内施設(図書館等)を活用する適切な資料収集方法を学ぶ機会があった。」「(5) 収集した資料や情報の組み立て方やまとめ方について学ぶ機会があった。」「(12) 授業内で発言する機会があった。」など，殆どの項目があげられた。また，14 年度に比べ，15 年度ではすべての調査項目で肯定的評価の割合が高くなり，教養セミナーの授業改善が認められた（表 3－1，3－2，図 2)。

一方，ディスカッションや発言の機会があったにもかかわらず，実際にディスカッションや発言を行ったどうかを調査した項目（8 と 9，10 と 11，および 12 と 13) では，機会に比べて実際に行ったとする肯定的割合はいずれも低い結果が得られたが，いずれの項目も経年的改善が見られた（表 4)。

表 4.　ディスカッションおよび発言項目における機会と実際の比較

他の学生とディスカッションをする		
（8）機会があった。	68.0	73.5
（9）実際に行った。	54.4	65.0
教員とディスカッションをする機会を設けた		
（10）機会があった。	70.3	73.9
（11）実際に行った。	56.6	60.6
授業内で発言する		
（12）機会があった。	85.3	89.3
（13）実際に行った。	37.5	44.8

数値は肯定的回答割合（%）で，左が平成 14 年度，右が 15 年度

一方，教養セミナー担当教官におけるアンケートでは，評価の高い項目として，「(1) 自ら調べて学ぶ機会を設けた。」「(6) プレゼンテーションをする機会を設けた。」があげられ，学生用アンケート結果との一致が認められた。また，教官用では，「(10) 学生が授業内で発言する機会を設けた」との項目も評価が高かった。その他の項目についても概して評価は高く，ほとんどの項目について学生アンケートとの相関がみられた(図 3)。

また，今後の教養セミナーに対する考えでは，「教養セミナーは今後の大学での学習に有益な授業であると思った。」「教養セミナーは今後も続けるべきだ。」とも 70%が肯定的な回答を示した。一方，教官へのアンケートについても，ほとんどの項目で学生アンケートとの相関がみられ，「教養セミナーは今後も続けるべきだ。」も2／3以上の教官が肯定的であった(図4)。

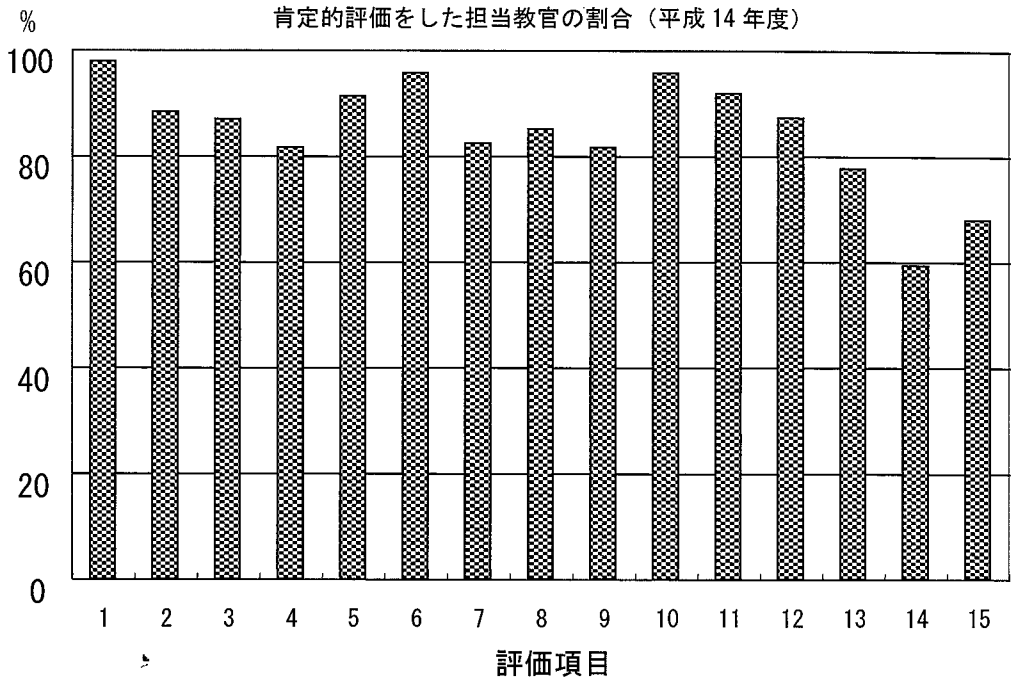


図 3.　担当教官への教養セミナーアンケート調査結果

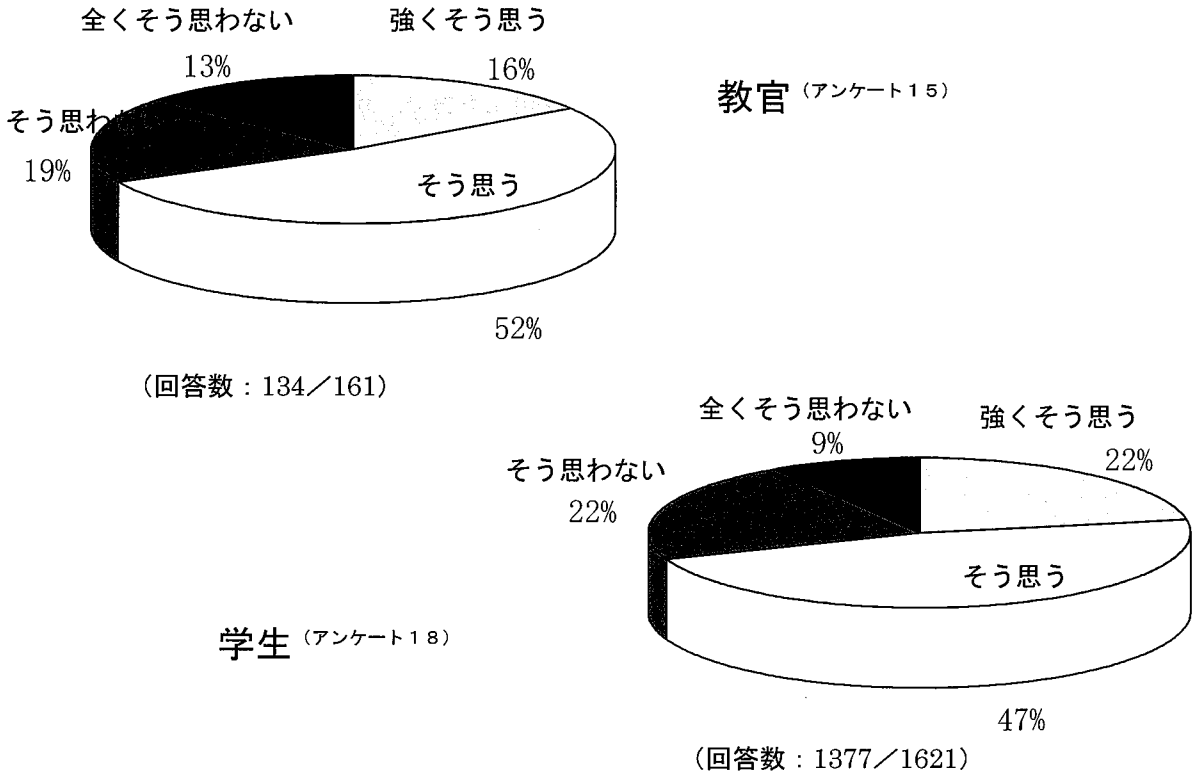
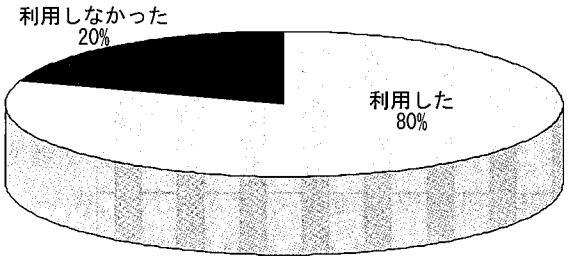


図 4.　教養セミナーは今後も続けるべきだと思った（平成 14 年度アンケートより）

【資料収集ガイダンスおよびコンピューター活用法ガイダンスの利用】

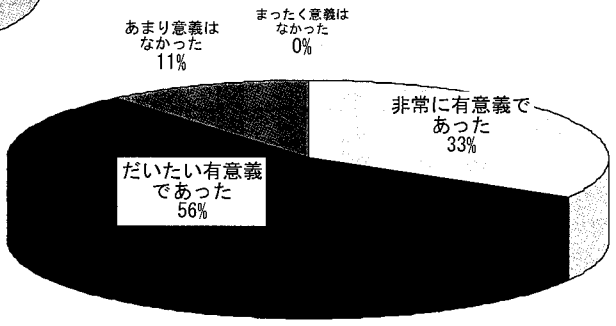
附属図書館による資料収集ガイダンスの利用

回答数=56



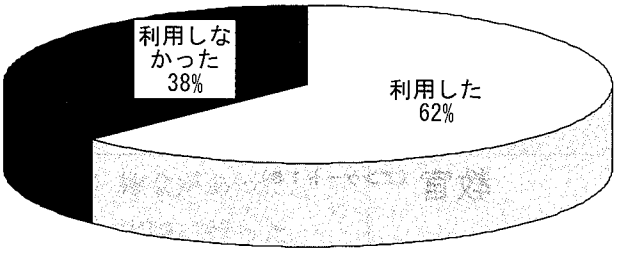
回答数=45

利用した方で，ガイダンスについて



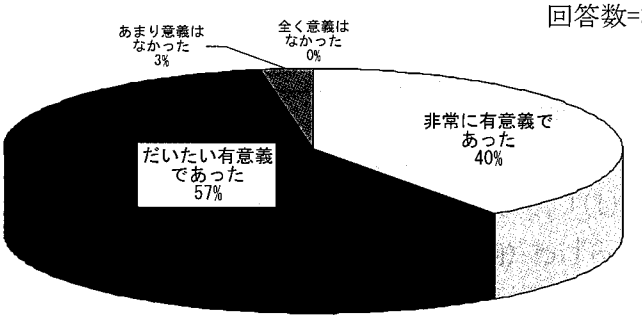
大学教育機能開発センターによる
コンピューター活用法ガイダンスの利用

回答数=56



利用した方で，ガイダンスについて

回答数=35



附属図書館による資料収集ガイダンスの利用率は 80%(回答数=56)に対し，大学教育機能開発センターによるコンピューター活用法ガイダンスは 62%と少なかった(回答数=56)。このことは，コンピューター活用法の講義導入が平成14年12月のFDでの討論で，教官の多くからの要求に応じて急遽，教養セミナー専門委員会から大学教育機能開発センターに依頼して実現したもので，開講のアナウンスが担当教官に周知させるに十分な時間がなかっ

たためと考えられる。

このコンピューター活用法ガイダンスの目的は，教養セミナーを受講する上で必要と思われる情報リテラシーの習得，教養セミナーで利用するアカウントについての説明，学内のパソコンの設置場所等についての説明をすることであるが，わずか1回90分の講義であったにもかかわらず，実際，申込数は76クラス（162クラス中）で約47%，受講学生数は816名で約半数が受講しており，アンケート調査でも，97%の教官が「非常に有意義」，「だいたい有意義」との肯定的回答を示す結果を得た（回答数=35）。

【レポートのテーマと事例集】

レポートの作成の有無は担当教官の裁量によるが，教育目標にレポートの作成があるので，多くの教官は調査研究のまとめをレポートとして提出させている。この場合，調査研究のテーマは個々の学生それぞれであったり，クラスで一つであったり，あるいは数人のグループであったり様々であるが，学生の意見としては，学部混成型の授業である特徴を生かして，クラス全体で一つのテーマ，少なくとも他学部の学生とのグループで調査研究を行う方がよいようである。テーマは，やはり，長崎に関連した観光地，名物，原爆など地域性のものが多い。なお，教養セミナー専門委員会では，作成されたレポートを提出してもらい，優れたレポートやあるいは次年度の教養セミナーの授業を進める上で参考になるようなレポートを選出し，事例集としてまとめ，次年度担当教官への参考資料として配付している。

表５　平成１５年度教養セミナー　テーマ例

日本の法規における「知的障害」概念の変遷
米に関する諸問題
車椅子から見た長崎大学
イラク戦争
鬼とは何か
運動部活動の在り方に関する研究～勝利主義，愛好主義を超えて～
市民の足・路面電車
エンジョイライフ
長崎VS福岡
ランタンフェスティバル～長崎の冬よ　熱く燃え上がれ～
色と人間社会
長崎県の木挽歌について
色彩の心理的影響と色彩感情を配慮した環境作りに関する研究

【教養セミナー成績評価について】

教養セミナーの成績評価基準は，教養セミナー教育目標に対する達成度で評価することになるが，一般的には，教養セミナーへの取り組み（ディスカッションへの積極的参加） 20 点，プレゼンテーション 20 点，レポート 60 点 （構成 20，文章表現 20，オリジナリティー 20）の割合で評価していると考えられる。成績については，相対的評価，絶対的評価と意見の分かれるところであるが，今のところ教官の裁量に負うところが大きい。

表6 教養セミナーの成績評価について

	14年度		15年度	
AA	512	30.2%	543	31.3%
A	845	49.8%	866	49.9%
B	264	15.5%	239	13.8%
C	53	3.1%	64	3.7%
D	11	0.6%	6	0. 3%
欠	2	0.1%	2	0. 1%
失格	11	0.6%	14	0.6%
	1698		1734	

総　括

【長崎大学の「教養セミナー」は学生・教官双方からどのように受け止められているのか】

長崎大学の教養セミナーは，学生による授業評価（マークシート式）や担当教官への授業アンケート（マークシート式および記述式）の結果から，教養セミナーの教育目標・到達目標についてかなりの肯定的回答が得られており，教育効果は得られているものと強く推察される。また，この肯定的回答の割合が経年的にも増加したことは FD 等による教官への授業に対する働きかけも十分機能し始めたものと期待される。また，教養セミナーの存続についての回答も，学生・担当教官ともほぼ2／3以上が肯定的であり，教養セミナーに対する期待がうかがえる。

なお，この他，自由時述欄等に記載された学生，教官の意見等について一部掲載する。

<u>「学生による授業評価」自由記述欄まとめ（学生，平成 15 年度）</u>

「大変だった」(9)

「大変だったが、楽しかった（役に立った、ためになった等）」(12)

「他学部の学生と知り合えてよかった」(18)

「楽しかった、役に立った、ためになった、勉強になった等」(51)

「時間が足りない」(4)

「担当教官によって内容が違う」(5)
その他，色々な反省点など(29)

記述式アンケート(担当教官，平成 14 年度)

① 学部混在型クラス編成について
- 学部混成型を評価する意見がやや多い。
- 学部別クラス編成を望む意見も少なくない。
- 一方，学生は学部混成型を評価する意見を多く寄せている(学生，平成14・15度)。

② 担当期間(授業担当教官は2人でペアを組み，7週目終了後交互にクラスを組み替えて残り7週を担当するか，若しくは1人で1クラスを担当するいずれかの方法を選択させる)
- 1 人 15 週担当を支持する意見が多い(教官，平成 14 年度は 55%，平成 15 年度は 82%)。

③ 人的・財政的支援を希望する声
- TAの確保
- 調査費・図書購入費・成果物の制作費支援など

④ 環 境
- 少人数対応の教室が少ない。
- 情報検索や発表などのための設備が完備されていない。

【教養セミナーに係る教育及び実施面の改善と今後の課題】

教養セミナーに係る教育及び実施面の改善

教養セミナー開講2年間に，教養セミナーに係る教育および実施面での改善が以下のようになされた。

教養セミナー専門委員会
- 原則として1クラスを1人の教官が行う(15年度ー)
- ガイドブック，ガイドラインの改訂(15年度ー)
- 優秀レポート集(14年度)，事例集の作成(15年度ー)
- 完全学部混成クラスの構成(16年度ー)
- 担当教官別シラバス作成(16年度ー，予定)

ファカルティーデベロップメント
- 教養セミナーに特化したFDの継続推進による教育改善(14年度ー)
- コンピューター活用法ガイダンス(15年度ー)

全学教育諸問題検討ワーキンググループ
- 経済学部の分離(教養セミナーの趣旨に従い，学部教育のセミナーとしない)(16年度ー)

今後の課題

教養セミナー導入後２年目の現在，教育効果を評価するに十分なデータはまだないが，現在そのシステムを構築中である。

また，教養セミナーに特化した FD への参加を通じて，教官の教養セミナーの意義や目的についての理解は徐々に浸透しているが，今後さらに進めていくべきであろう。

学部混在型授業への教官・学生の支持は大きいが，一方で，学部混在による教育指導の無責任化や学部間による教育目標の相違から，混在型の問題点も指摘されている。

一方，実施面においても，担当教官の学部割当数における問題点として，全学出動体制を大前提とするも学部負担の不公平感や，他の全学教育科目担当優先による教養セミナー担当教官確保に支障があるとの意見も散見される。

さらに，分散した大学キャンパス間の移動による教官負担の増大や，適切な広さの講義室の不足今後解決していくべき課題もある。

（研究協力者：長崎大学大学教育機能開発センター井手弘人講師，古賀揚維講師，天野智水講師，栗山一孝教授に深謝します）。